★詩集

ストライキ宣言

白須孝輔著　藏原惟人序

東京　紅玉堂版

詩集ストライキ宣言

白須孝輔著

TOKYO

50

わしの俺が新しい立異りの淫女を
淫本論の為に掴むべきものは言ふまでもない
わしがそのために淫本論を読むな、とは
どうして言へる得ることが
わしの俺は殺されたのだ

白鴉幸輔

集　詩

宣言キイラトス

白須孝輔

著

東京紅玉堂版

序

詩は生活と不可分の中にある。かつて生活の必要から生れて來たわが國のプルジョア詩が、その意義を失ふと同時にその價値をも喪失してしまふと、そこにプロレタリアの階級的必要を體現してプロレタリア詩が生れて來た。この詩集の著者白須孝輔はこのプロレタリア詩をわが國に育てて來た詩人の一人である。

彼の詩はその數に於いて極めて少いし、また、純技術的に見るならば、他のプロレタリア詩と同樣に、まだ幾分か未熟な所がないでもない。しかし彼は、時代の必要を見る鋭い眼と、階級的敵に對する激しい憎惡と、プロレタリアの仕事に對する燃えるやうな情熱と、しかもそれを傳へるに冷靜な筆とをもつてゐる。これが我々の詩にとつて最も必要な要素であることは云ふまでもない。

これ等の詩は、決して暇な人間が、何日も机に向つてゆつくりと書き上げたものではない。それは多忙な白須君の闘争の間に生れたものだ。だからこれは書齋や客間の安樂椅子の上で讀まるべきではなくて、廣く工場で、職場で、農村での現實的な仕事の合ひ間に讀まれるに良き詩集である。

一九二九年一二月

藏原惟人

目次

序……一

一

おつ母さん……七

ストライキ宣言……一三

買はれた姉妹……一九

二

戰爭物語……二七

俺達を村へかへせ……三三
わしの伜は殺されたのだ！……三九
戰爭はなにも殘してくれなかつた……四五
三
再建への道……五三
詫狀……六一
新たなる怒りへ……六五
後記……六九

一

おつ母さん

―職場からの便り―

おつ母さん
わら半紙の手紙は今日こつちへ届いた
全く讀みづれえ手紙だつた
が、言はれるまでもねえ
身體だけしか持たねえ俺のことだ
これだけは大切に使つてゐるぜ。

ほんとに早えもんだ
こつちへ來てから半歳になるんだから
だのに俺ときちや情ねえ話だが
まだ氣の利いたストライキひとつ起せねえ有様だ
が、おつ母さん

ここのやまはちつとばかりでけいんだ
ここをおとすにや　あと半歳や一年はかかるだらう
見てて呉んねえ
見てて呉んねえ！

ほいほい
俺のことばかり並べすぎたやうだ
手紙ん中の金は、たしかに貰つたぜ
いつも、いつもすまねえ
今度こそ、眼鏡のひとつ位え送りてえと思ひながら
こつちの仕事に追はれちやつてるんだ
さう、さう

俺がそつちで働いてゐた時分
××でやられた俺を貰ひ下げに來て呉れたとき
——眞面目に働きやいい稼ぎ手になれるだらう、とは
警察の石の門から聞かされた言草だつた
してみると、俺もあんまりいい稼ぎ手ぢやねえやうだ

ところで、おつ母さん
しばらく會はねえ裡に、すつかりいぢけちやつたやうだが
もつと元氣を出して呉んねえ
送つた新聞と雜誌には
ぜひ讀ませてえ話が載つてるんだ
ほら

三月の檢擧でさ
うまくづらかつて呉れたとばかり思つてた俺達の渡×がよ
到頭やられてしまつたんだ
その渡×にや、丁度おつ母さんと同じ歳のおふくろがあるんだ
見て呉んねえ、そのおふくろの顏を
讀んで呉んねえ、そのおふくろの言葉を
——どうか伜に負けないやうにやつて下さい
——どうか伜の×をとつて下さい
おふくろは唇を嚙んでかう言つてゐるんだ

なあ、おつ母さん
このでけえやまをおとすまで

あんまりいぢけねえで待つてて呉れよ
俺達は俺達の××のためにも
畜生！
ここの煙をふつとめねえでおくものか！
やまがでかけりや俺達だつてはりがあると言ふものだ
えつ、おつ母さん
そのときや赤飯を焚いてお祝ひだぜ。

―一九二九、三―

ストライキ宣言

―女車掌の手記―

わたしはおもはず拇指を嚙んだ
——議長！
——議長！
にはかに會場はつなみにどよめいた
……
——討論ハ打チキリマス
議長の唇は、それつきり動かない
わたしの耳はもうなにも聞えなくなつた。
——氣をつけて、な
今朝、病床から這ひあがつた父の言葉

——お願ひだからおとなしく、ね
母の眼はぬれてゐた
せめて
回答日の明後日まで
——即行ノ可否ニツイテ決ヲトリマス
まあ、よかつた
議長の手はぶるぶるふるえた
——否決ト認メマス
——議長！
——議長！

ふたたび會場はどよめく
——議長！腰ぬけになつたかッ……
——議長！
——議長！
——裁決しなほせッ！
——異議なし、異議なし！

議長は手を擧げた
……一瞬、會場はなりをひそめた

——諸君……
——回答日マデ待ッコトハ敵ニ充分ナ準備ヲ與ヘルコトデス

——ドッチが相手の機先を制スルカ……
拍手が議長の言葉をのんだ
議長はごくりとつばをのんで默つた

——即行贊成ノ方ハ擧手ヲ願ヒマス
わたしは眼をつぶつた
さうだ、回答日まで待つことは敵に充分な準備を與へることだ

起て餓えたる者
起て呪はれたる者
今ぞ日は近し
醒めよわが同胞(はらから)暁は來ぬ……

インターナシヨナルの符がわたしの耳もとをかすめた

お父つあさん、おつ母さん
ごめんなさいね……

一九二九、一二、

買はれた姉妹

—製本工女—

琉球表の荒い畳の網の目が
姉妹三人の向ふ脛を爛れあがるまでにむしばむ
いちばん末の妹が、折板の手をそつと膝のあたりへまはすと
しつきりなしに眼をとがらしてゐるおばさんのがらがらした聲が
折臺の上にとびあがる。

燒きつくやうな背骨の痛さをおさへて
「買はれた」三人の手は、ひとしきり動く
四ツ折千枚で十三錢
八ツ折千枚で十六錢
——折板が指先に凍えつく朝
脇の下に一杯の汗をためて折りつづけても

一日七千枚が精々だ。
十八歳の姉が百十五圓
その妹が百圓
いちばん末の妹が八十五圓
——五ケ年の年期で買はれた姉妹たちの値段だ
だのに
一日九十一錢づつの稼ぎでは
月一回の休日に、五十錢づつの小使錢はおろか
目刺一束のお菜にもありつけない。
が、
酒のためにあほぶくれたおばさんの
黄色い齒をむき出す笑顔をみようと

一日一萬枚も折らうものなら
手首が、むつくり赤く腫れあがつて
指先がいつまでも、いつまでも物を掴むことを忘れてしまひ
首すじまでがこはばつてしまう、
それに
いちばん末の妹の手が
ちつとも動かなくなつて
眼ばかりひきつつてしまう。

なかの妹と姉が
おばさんが酒をあほりに行つた眼をかすめて
折りためた幾枚かを、末の妹に分けてやつても

まだ十二歳になつたばかりの妹には
一日十三時間もの根氣が續かうはずがない。

指を凍らせ、うでを腫らせ、首すじをこはばらせながら
「買はれた」手は、無限に安い激しい仕事のなかに身體ごと埋もれてゆくのだ。

一九二八、一二

11

戰爭物語

××たちよ！
ひとたびは騎士の死、名譽ある×人の死よ
ベルダンの八町四方に五時間八萬發の砲彈が
獨逸の××であるプロレタリアの手から
佛國のプロレタリアである××達への贈物となつたことを知るか
さらに
二〇〇〇萬發の砲彈が
ソムンの佛國兵士から、戰場一面を砲彈化する準備の下におかれた事實を知るか、
さらに
シャンパーニュに於ける英軍が
僅々四十五分間に、一三五〇〇〇發の砲彈を發射した記錄を知るか。

君達は君達を×取した全××の大部分が、君達を益々貧困と窮乏におとし入れる
××主義的××費のために費消されてゐる事實を知るか、
××四九P強、英國一七P強、米國一九P強、佛國二〇P強、伊國一三P強、
（一九二二年現在）

××達よ、何らの準備なく×場に行つた××達よ！
君達の愛すべき同志達の
九九〇萬人の死と
二〇二九萬人の傷者と
五九八萬人の行衛不明者と
さらに巧妙なる公債制度のもとに、幾代もの君達の子孫が×取される方法以外
に、×達はこの××に於て何ものをかち得たか、

獨逸の兵士達は一人當り五一四弗の負債を
佛國の兵士達は四二六弗を
英國は八三一弗を
伊太利は一六七弗を
しかも君達の國富に對する比率は、獨逸五六P强、佛國三三P强、米國三一P强
伊太利三二P强……

君達は遂にどん詰りまできた！
君達は君達の負債が君達の責任でないことを知悉したらう！
君達は君達の負擔に抗爭せよ！
さあ、國境的觀念の微廢だ！

慶手は君達の頭上に、さらにのびる
おお、全世界のプロレタリアが固く握手した日よ！
必要なのはプロレタリア××への××である。

一九二八、二

俺達を村へかへせ

―麻布××隊××事件―

兄弟！
ぢや　行くぜ
どうせ暗の裁判――××會議――だ
水風呂や木刀の××は決つてらあ
だが、兄弟！
××にや、村のこと　組合のこと
つまり俺達の暮しのことは　これつぱつちも喋れねえのか
爺父のとこからの「立禁」の手紙
それでも
俺達は　いきりたつちやあいけねえのか
兄弟！
ただせえ苦しい俺達の暮しだ

働き手が×隊へひつこぬかれたあとで
一體　誰が食はせてゆくのだ、
そこを見こんだ地主の「立禁」だ
兄弟！
それでも俺達は嬶や餓鬼を干乾にしなきやならねえとでも言ふのか

兄弟！
俺達は　俺達の村のことで頭が一杯だ
俺達はどうすりやいいんだ
俺達は　みんなでどなつたんだ
「俺達を村へかへせ！」
兄弟！

思ひ出しても見ねえ
俺達三人の言葉が　五百人の口から吐きだされたのだ
俺達三人の暮しが　五百人の暮しなんだ
俺達三人の「立禁」は五百人の「立禁」だ。

だが　兄弟！
ものの半時とたたねえ裡によ
無腰の俺達の前にや
憲×と×闘×のやまだ

え、兄弟！
男泣きに泣いたのは　俺達五百人ばつちちやねえぞ

え、兄弟！
こんだあ別の手でやらうぜ。

一九二九、一

わしの仲は殺されたのだ！

——一九二八、四、二七　時事新報三面所載——

わしの息子は×されたのだ
わしの息子は銃×されたのだ
それに違ひない
××の秩序のためだと言ふのだ
××の秩序のために眠かくしもしないで×されたのだ

わしは×された倅の父だ
わしの倅がなぜ×されたのかは
わしがいちばんよく知つてゐるのだ
わしはたつた一言語ればいい
わしの倅は新しい世界のことを考へてゐたのだ
わしの倅は虐げられ飢餓のどん底に自由のひとつかけももたない朝鮮人のことを

いつもいつも考へてゐたのだ
わしの倅が新しい世界の姿を
資本論のなかに掴むでゐたのは言ふまでもない
わしがそのために資本論を讀むな、とは
どうして言ひ得ることか

わしの倅の行く途を
わしはわしの胸をどつかと叩いて喜こんでゐたのだ
新しい世界のことを考へてゐた倅にどんな罪があると言ふのか

搜査隊の二名を
射殺、已も殺さる

倅が骨で歸され狂つた父
師團へ四年間掛りの詰問狀
射殺を隱した事實が曝露す
朝鮮惠山鎭守備隊の事件

わしが氣狂ひだと
わしが氣狂ひになるには、餘りに事件のいきさつをよく知つてゐるのだ

わしの倅が入營したのは大正十三年
わしの倅が脫走したと言ふのは大正十四年十月
眞面目に考へてみるがいい
まる一ケ年も××のやうな×營に辛棒したその上で

誰が脫走を企てるものか

××と機××のふすまで
平和な朝鮮人の部落を包圍し
××と×××と
××の名の下にするリンチ
眞面目に考へてみるがいい
これが×備×の仕事かを
これが××の名の下に行はれる動員かを

わしの倅は×されたのだ
守備隊の裏山にある壕の上で

×もなくあぶり×された××人達のまつ白い骨の山の上で
わしの倅は上×のリンチに組しなかつた理由の下に
わしの倅は銃×されたのだ

倅！
お前が×されてから丁度四年目だ
わしはお前がなぜ×されたかを知つたのだ
お前は馬賊に殺されたのではないのだ
お前は馬賊でない馬賊の銃×を拒んだから×されたのだ
これがせめてもの手向けだ
ほら、いばらの若葉がくすぶるだらう
とげをもつた煙りがくすぶるだらう。

一九二八、六

戰爭はなにも殘してくれなかつた

―或る少女の手記―

「早く大きくなつてお呉れ」
母は半身不隨の床のなかから
かさかさな聲でいつも涙ぐむ

父は東鶏冠山の中腹で
機關銃の彈丸で胸、いたを十三發射ぬかれたまま
決死隊の白襷を鮮血に染めて倒れた
それから
十何年かの月日がながれた

年に三百圓たらずの恩給——私には恩給と言ふ言葉が癪にさはる——で
母と私は生きつづけた

私達が軍人の遺族であるためにではなく
私達がそれ以外には食べられない軍隊のまつくろなふやけきつた殘飯を食べつづけて
私は段々大きくなつたけれど
母は日毎に痩せおとろへてゆく

父は忠義のために戰死したかも知れないが
私はまた孝行のために、そして私達母子のために
どれだけ生きなければならないのか
私は毎日半里もさきの
靴下工場に通つて
一日三十三錢づつの手間賃を稼いでゐる、

北國の布團までじめじめと濕める十一月頃になつて
一日二百足も作らへる靴下を
せめて半身不隨にふるへてゐる母に
一足だけでも買ふには
私は三日間も夜業をしなければならない

自家では空腹になつた母が
軍人の妻であるために
しのびにしのむでのたうつてゐる身體を
私は物も言はずに叩いてやらうと急ぐ

藥はおろか、火にしてやるボールの一片もない馬小屋の片隅では

火の出るやうに叩くのが
母にも、私にも、一番暖かくなる火だ

さうです
僅かばかりの、それもいまは高利貸の手にある恩給を
いつまでも、いつまでも貰ふのには
×さないやうに母を叩くことが私にできるたつた一つの孝行なのです

が、
或る朝、お櫃の米が凍りついた朝
私が一生懸命に叩きつづけたのに
母は

戰地からの父の最後の
「眠むい」「眠むい」と書いてある手紙をみつめながら
母の眼はぎよろりと動かなくなつてしまつた。
——高利貸の所からと、役場からの印刷にした手紙が届いた
××は私になにも殘しては呉れなかつた。

一九二八、一〇

三

再建への道

——突如行衛不明になつた同志仁×二×に、この拙き詩をおくる。

きみのおばあさんは言ふ、みなさんのおためにすこしはなつたのでせうか、……と、彼がゐなくなると同時に俺達の×新はばつたり出なくなつた。彼は俺達の無×のために彼のすべてを投げだしてゐたのだ。

政府の法律が
二郎を縛り
政府の法律が
二郎を牢獄につなぐ

二郎が拘引かれた五六日のち
記事解禁が出た
あの日からもう六十日經つたけれど
二郎は戻らない。

が、
わたしは諦めてゐる

わたしは六十二の今日の日まで
はつきり、この眼で覺えこんできた
政府には權力がある
政府には×理が利く
ことを、

それにしても
二郎は一體どんな仕事をしてゐたのだらうか
なんでもわたしには話す二郎が
仕事のことだけは、ついぞわたしにも話さなかつた
二郎はいつも急がしさうだつた
さう、さう

どしや降りの晩だつた
ぐしよぬれにぬれた二郎の洋服に
カギ裂きがいくつもあつたのを繕つてやつたのは……
あの晩
二郎はわたしのそばで
血走つた眼で腕組みしながら
せはしげな息づかいでなにか一生懸命考へてゐたつけ……
ああ！
二郎の顔がいまでも眼に映るやうだ！
……いまは、
赤い練瓦の厚い塀が
二郎とわたしの身體をよせつけまいとさへぎつてはゐるけれど……

曉
二郎の枕時計がなるかならぬうち
×××ルを先頭に
二郎を×りにきた
二郎は
二郎は……
淋しさうに笑つてゐた、
——おばあさん、ぢきに歸りますからね……
二郎は、それつきりなにも言はなかつた。
……どしやぶりの降から十日も經つたのちだつたらうか……

二郎がゐなくなつてからにはかに寒くなつた
もう六十日
毎朝
枕時計は、わたしに二郎が拘引かれたときを告げる
ときだ！
ときだ！

が、二郎はまだ戻らない

一體、二郎はどんな仕事をしてゐたのだらうか
わたしは、それを知りたい！

みなさん！
二郎は勞働者農民のおためにすこしはなつたのでせうか？

一九二九、一二、

詫　狀

——だが勞働者の×はたつた一つきりだ——

みい坊
この間の逢曳はだいなしだつたな、
だいいち、てめえは泣きやがつた
ちよツ……
泣くのはてめえの勝手だが
だからつててめえが正しいとは言はせねえぞ

そらさうよ
おいらが面倒くさくなつて
てめえの赤い頬つぺたを
いやと言ふほどひつぱたいたのは悪かつた
そいつは無條件であやまるさ

な、かんべんして呉れよ

と、言つて、おいらだつて癪にもさはらあね
うんでい、てめえは
大山の「提案書」にあてられやがつて
棒暗記にのみこんできた「現下の客觀的狀勢に照應してこの際我々が○○×××
とは全然別個の我々自身の××的左翼政黨を持つのが正しい」なんて
おいらあのとき考へた
けツ……
こいつがいまごろの婦人闘士かとよ
揚句の果はなんてぬかしたんだ
口をとがらして「ウルトラ」

畜生！　おいらはまた腹が立つてきた
おいらの悪いところはあやまる
だが、
てめえとつくり考へなほせ
誰がなんとぬかしても××者の×はたつた一つきりだ。

新たなる怒りへ

――ロシア革命史の一節――

「その日は、丁度群衆の氣分と同じやうに、斑らな天候であつた。空には太陽が
灰色の雲間から覗いて、冷たい光で人間の顔を照し、單色の疑惑の陰で、それを
覆ふてはまた陰れた。」――ゴルキー――

その日、一九〇五年一月九日
冬宮の朝のしじまは
馬蹄と銃劍の微塵もすきまのない鎗ぶすに蹴破られ
うづ高くつらなる廣場の雪は
まつ赤な、鮮血に染めぬかれた。

――その日の午後
彼のお方（××）の聰明を信じ

彼のお方の慈悲深さを期待してゐた「無腰の一大群衆」であるところの
幾百名の勞働者農民の××が奪はれたのだ。
敵は
そして味方は
――誰のため誰と闘はねばならぬのか
幾十萬の勞働者農民は、その日以後はつきりと正體を掴んだのだ。

冬から冬へ
雪は
勞働者農民の不淨な血痕に覆ひかぶさつてはきても
深く大地に滲みとほつた怒りの血痕は
來る朝、來る朝の太陽とともに

新しい怒りと、ちからを呼びたたせる。

一九二九、一

後記

ここに收められた詩十篇は、昨年の春から現在までの約一ケ年半にかけて作られたものの大部分である。

いま、それらを一册にまとめあげてみて、その餘りにも僅かな量に驚く、と、ともに、この一ケ年半に於ける僕の所謂「詩」を作る時間の少なかつたのに比例して、他のそれと等しい、或はもつと重要な仕事のために費されたことに思ひ至るとき、せめてもの慰めを感じる。

まことに、この一ケ年半は、僕個人にとつても、僕の屬する全日本無産者藝術團體協議會（ナップ）の闘爭の歴史にとつても、そして一般的には日本の無産階級解放運動にとつても、過去の數年間に匹敵する多忙さと、しかも決定的な問題

を正しく解決した時期であつた。

漸く、われわれのあらゆる闘爭が、むきだしに、曾つてなかつた激しさを以つて展開されやうとするとき、今後われわれの詩が、かかる詩集としての形をもつて世に送りだされるか否かはすこぶる疑問である。

既に、「詩」を作る以外の仕事が、僕をわれわれの部署にまちもうけてゐる。

では、

終りに同志藏原が多忙のなかから、わざわざ序文を寄せてくれた勞を深謝する。

一九二九、一二、

白須孝輔

目錄進呈

昭和五年二月一日印刷
昭和五年二月五日發行

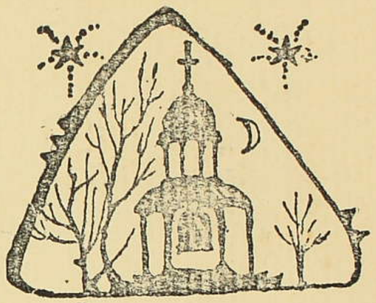
詩集 ストライキ宣言
【定價金五十錢】

著者 白須孝輔

合資會社紅玉堂書店代表社員
發行者 前田隆一

印刷者 東京市本郷區森川町一番地

東京市本郷區森川町一番地
發行所 紅玉堂書店
振替東京二〇六六五番



井上康文編輯　月刊

詩集

定價二十錢
送料一錢

御願ひ

まことに御手數のことと存じますが葉書を以つて御住所と御姓名を紅玉堂宛に御知らせ下さるやうに御願ひします。新刊書の報告や弊店の新しい出版情況を御知らせしたいと存じます。

現歌壇の權威
二大雜誌

毎月一回發行
一日

短歌雜誌

定價五十錢
送料一錢五厘

新興歌人

定價二十五錢
送料一錢

◆雜誌見本御入用の方は各郵券十錢をお送り下さい◆

無產者歌人叢書出づ!!!

短歌を眞にいきいきとプロレタリア的、煽情的たらしめることは、それが大衆に最も普及してゐる形式である點、短いさ中に於て創作してゐる點、至つても要でないはゆる封建主義、俳諧主義、宗匠主義が、現に歌壇に積、跳梁してゐる。それの斷乎たる排擊とプロレタリア短歌運動は逆り蜂起せ、プロレタリア短歌へ立場から歌ひつづいた無產階級の熱血文字を見よ、讀め、讀め！

九月一日

坪野哲久著
定價五十錢
送料四錢

プロレタリア意識の下に

田邊一子著
定價五十錢
送料四錢

戰の唄

淺野純一著
定價五十錢
送料四錢

貧乏の歌

渡邊順三著
定價四十錢
送料四錢

プロレタリア歌人同盟編

プロレタリア歌論集

四六版 二八〇頁・箱入上製美本・定價金一圓三十錢・送料八錢

突如として歌壇に風雲を捲き起したプロレタリア短歌運動の陣營における主要なる論文二十七篇を集めて一卷としたもので、プロレタリア短歌に關する議論が如何に發展したかを知るには最も適當な書である。プロレタリア短歌を肯定する者も否定する者も必ず一讀すべき良書としてお奬めする。

執筆者 伊藤信平 會田毅 浦野敬 淺野純一 井上義雄 坪野哲久 渡邊順三 田邊駿一 岡部文夫 南正胤（順序不同）

發行所 東京市本郷區森川町一 振替東京二〇六六五番 紅玉堂書店

紅玉堂文庫

出版の言葉

小さくとも纏つた著作を集めて低廉な價格と携帶に至便な書物を作りたいと思ひました。そして得るに從つて續々刊行するといふ方針です。故に豫め何が出るといふ豫告をしません。追々に此文庫の冊數が增んで行き、百になり千になつてゆくうちに本文庫の眞價が明瞭になることゝ思ひます。（紅玉堂主人白）

啄木歌集 石川啄木著 定價金一圓 送料金六錢

歌の作りやう 窪田空穗著 定價金七十錢 送料金六錢

作歌問答 窪田空穗著 定價金八十錢 送料金六錢

改選 **現代短歌用語辭典** 松村英一編 定價金一圓三十錢 送料金八錢

詩集 **けがれた王座** 縄田林藏著 定價金五十錢 送料金四錢

自由詩の作り方と鑑賞 井上康文著 定價金一圓 送料金六錢

良寛・元政愚庵選集 野々村修滿著 定價金五十錢 送料金四錢

啄木の詩と其解說 佐藤寛著 定價金一圓 送料金六錢

山内房吉氏著・柳瀬正夢氏装幀

プロレタリア文學の理論と實際

四六版　二六〇頁
箱入上製美本
定價　金壹圓三十錢
送料　八錢

この書の内容が、一九二三、四年頃から、一九二八年頃までの日本のプロレタリア文學運動の發展を反映してゐる。讀者はこれに依つてわが國のプロレタリア文學運動が如何にして起り、如何なる闘爭を經て今日に至つたかを知ることが出來るだらう。わが國のプロレタリア文學運動は著しい發展を遂げたとはいへ、それが勝利への道には尙幾多の困難が横はつてゐる。しかも刻々成長しつつあるプロレタリアートはあらゆる苦難と障害とを克服するであらう。それは荊棘の道であると同時に輝かしい勝利への道だからである。

本書の讀者が、このことを理解すると共に、この輝かしい勝利への闘爭に加はることを期待したい。

發行所　東京市本郷區森川町一　振替東京二〇六六五番　紅玉堂書店

紅玉堂文庫

出版の言葉

小さくとも纒つた著作を集めて低廉な價格と携帶に至便な書物を作りたいと思ひました。そして得るに從つて續々刊行するといふ方針です。故に豫め何が出るといふ豫告をしません。追々に此文庫の冊數が增んで行き、百になり千になつてゆくうちに本文庫の眞價が明瞭になることゝ思ひます。（紅玉堂主人謹白）

現代名歌評釋　松村英一著　定價金五十錢　送料金四錢

明治歌壇概史　尾山篤二郎著　定價金五十錢　送料金四錢

歌はかうして作る　尾山篤二郎著　定價金九十錢　送料金六錢

獨歩詩集　國木田獨歩著　定價金七十錢　送料金六錢

詩集　月夜の牡丹　山村暮鳥著　定價金七十錢　送料金六錢

新訂萬葉集　松村英一校訂　定價金一圓八十錢　送料金十錢

歌と人　石川啄木　西村陽吉著　定價金五十錢　送料金四錢

論集　階級戰の一隅から　渡邊順三著　定價金八十錢　送料金六錢

石川啄木の三名著

啄木歌集

三六判上製
二七〇頁
著者筆蹟口繪入
定價金壹圓
送費六錢

石川啄木は新歌壇第二の革命者也。彼は曾て短歌が歩まざりし大陸処女なる境地を開拓せり即ち彼の繊細華麗なる情緒を寄ぶを以て短歌の能事とせる長袖者流のデレッタンチズムを蹴破して自己の生活を歌ひ眞に短歌をしてその居る處に居らしめたり。啄木歌集一卷八百首はその躍動く能はずしてその心早くも一切の束縛より放たれたる新時代青年の苦悩の産なり。

啄木詩集

三六判上製
二七〇頁
著者得意筆蹟口繪入
定價金壹圓
送費六錢

啄木は後年一個のデロリストとして流離と無様の時代人となつたが、青年時代の華麗な詩篇を描くとき、そこに我々は豊かな詞藻に富まれた生れ乍らの一詩人を見出すであらう。その時は多彩な現實の諸相に夢と憧憬を織り交ぜた浪漫的色彩を帯びてゐる。本書はその代表作八十餘篇を盛れるもの詩調の玲瓏さは讀者を再唱三唱せしめずには措かない。

啄木遺稿

三六判上製
四六〇頁
木下茂氏裝幀
定價壹圓五拾錢
送費金八錢

一啄木遺稿」は著者の遺せる唯一の思想的文集にして、歌壇にかの有名なる社會主義詩「はてしなき議論の後」以下三十五篇の詩と、後年の著者の傾向たりし社會革命家としての理想を語るべき長短十餘篇の思索感想を録む言論熱烈直情眞摯若くしてその思ふところに行くを止めかねし著者の心は行文の間に横溢す。吁、その筆端の何ぞしかく不平に満ち、何ぞしかく鋭利なる！歌集とともに愛讀を賜へ

ムモアダンシャロック・ホルムス

A・コナン・ドイル作
藤原時三郎全譯

ホルムスの思ひ出

内容

○銀炎○實色い鍵○怖買店員○グロリア、スコット號○マスグレーブ家の禮式○レイゲートの地主○邪惡の人○家附き患者○希臘語直譯○海軍條約文書○最後の問題

四六總洋布裝幀
本文三二〇頁
定價一圓五十錢
送費十錢

ニコウアランビアンナイト

R・L・スチフンスン作
桃井津根雄全譯

近代人はより多くの部分とより多くのニコチンとを要求する。惰氣と退廃との外何物も與へない平凡極まる小説や物語に倦怠した近代人は、轉じて本書を繙き給へ、其處に展開された怪奇なロマンスの世界により多くの慰分とより多くの、コチンを見出すであらう。惰氣清々たる在來のロオマンスの類型を破つて清新な新浪漫派を唱へたス氏の魔惑的な描寫は讀者を最後の一頁まで飽かせずには置かない。本書は又忠實な全譯であるから原書と對照して讀まれる方の參考書となる。

四六總洋布裝幀
本文四〇〇頁
定價一圓五十錢
送費十錢

スタデイン・スカアレツト

A・コナンドイル作
桃井津根雄譯

定價一圓二十錢
送費八錢

土から生れた農民の叫び！

中村孝助著

口語歌集 野良に戰ふ

四六新型フレッシュ裝幀
定價金七十錢
送費金四錢

問題藝術・傾向藝術が、それ自身として價値の高いものであるか低いものであるかといふことに就ては議論として殘された餘地がある。この集は若き日本の資本主義時代が生んだ一農民の歌土から生れた歌として、かなり問題的、傾向的の色彩を多分に含んではゐるが、しかしこれの持つ力は、さういふ事を議論する所を超へてもつと深い所に行つてゐる。所謂膚淺の境を超えてゐる。そこには土への愛着と土の哀しみと、物質文明の呪詛と人類的正義の叫びがある。更に土に育くまれる人間生活の種々相がある。この意味に於てこの集は改めて問題藝術たり得る資格を持つやうになるかと思ふ。

口語歌集 土の歌

四六新型フレッシュ裝幀
定價金七拾錢
送費金四錢